

「あのさ、それ本気？」

「はい」

わたしを見下ろす顔はいつになく真剣で、クマが目立つ目にはわずかな怒りさえ覗いている。

仰向けに倒れた場所は先輩のベッドで、妙に居心地がいい。程よくくたびれたシーツが、大きく露出した肌によく馴染んだ。

節くれだった長い指が、わたしの首元にあるちやちな鈴を、ちり、と鳴らした。

「こんな格好で男の部屋にいる意味、分かってる？ 何されても文句なんて言えないわけなんだけど……流石の君もそこまで馬鹿じゃないでしょ？」

ピンクのリボン仕立ての首輪が、ごくんと喉が鳴る動きに合わせて擦れる。伸びっぱなしの長い前髪の隙間からわたしを見る目は、餌を前にした獣のよう。鈍い熱を揺らしながら、それにかぶり付く許可が降りるのを待っている。

——先輩のこんな顔、はじめて見た……。

声だって普段の気怠げなものとは全然違う。苛立ちと、それから強い情欲が滲んでいて向き合っているだけで肌が熱くなる。今にも襲いかかつてきそうな雰囲気、本当なら怯えるところだろう。

でもわたしは飛び上がりたくなくなるほどの感動に震えていた。

——……やっ、と、や……っ！ 女として見てもらえたってことだね

……!?

苦節半年。触れ合うだけのキスより先に進めそうな雰囲気に、思わず口元

が緩んでしまう。

先輩は右の眉毛だけを持ち上げて、不可解なものを見るような目をした。

「何その顔。今自分がどういう状況なのか、ホントに分かってる？」

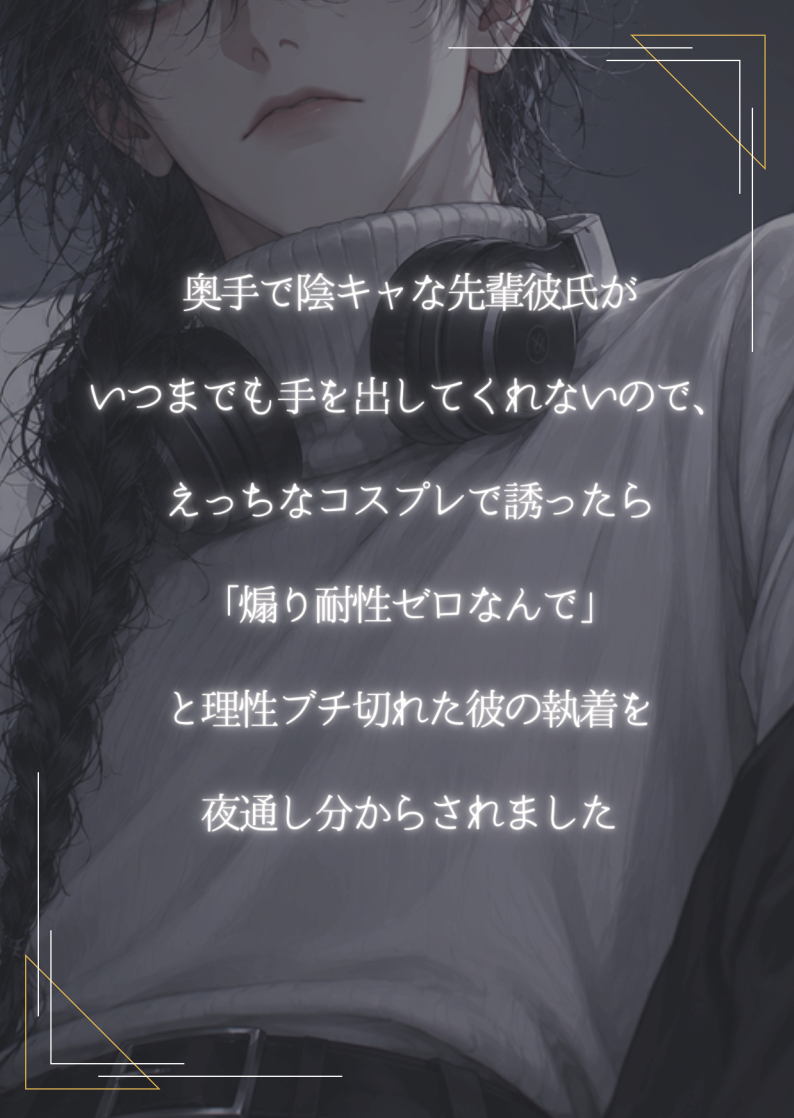
「分かってます！」

あまりに色気のない返事に眉を顰めた後、首輪を指で——ごく優しく、甘く引っ張られた。鼻先が触れ合って、吐息が絡む。

「——……あ、そ。じゃあもうこの先何があってもクレームは受け付けないんで。他人^{ひと}を煽^ほる時の覚悟^{かくご}つてものを覚えて帰^{かえ}ってもろて」

……あ。まずい、かも。

ネットゲームで敵を罠に嵌めて笑っている時と同じ顔をしてる。
にいい、と笑った口から先輩がいつも食べているミントタブレットの匂いがした。



奥手で陰キャな先輩彼氏が
いつまでも手を出してくれないので、
えっちなコスプレで誘ったら
「煽り耐性ゼロなんで」
と理性ブチ切れた彼の執着を
夜通し分からされました

マンションの三階にある自宅の扉に鍵を差し込む。こぼれた小さなため息は、ガチャリと回る鍵の音にかき消された。

——今日もお泊まりは無し、かあ……。

仕事の帰りに彼氏である伊吹先輩の家にお邪魔して、送り届けてもらったところだ。お互いの家はひと駅分しか離れていないから、どれだけゆっくり歩いていてもすぐに着いてしまう。

もつと一緒にいたいにな。

ちらりと先輩を見上げた。白々しい廊下の明かりに照らされた顔は相変わらず血色が悪く、目の下のクマが透けて見える。長く伸びた前髪は生えぐせのままに真ん中で分かれていて、伸びっぱなしの長い後ろ髪は三つ編みでひと束に纏まっている。

「……何。どした？」

「……先輩、格好いいなあって」

「疲れ目？」

「違いますっ！」

音も立てずに笑う顔は鼻眉目なしに見ても格好いい。

通った鼻筋にくっきりとした二重瞼。よく見ると彫りが深く、どこもなく異国の雰囲気がある。じつとりとした目つきのせいで長い睫毛が白い頬に影を落とすところも、なんだか色っぽい。お世辞にもシャキッとはしていないけど、そのくたびれた空気が醸し出す色気と掠れ気味の低い声がたまらなく好き。

——見た目に全然拘らないから見つかってないだけで、先輩が本気で着飾

ったらあつという間に女の子に囲まれるだろうな……。顔ちっちゃいし、足長いし、ポテンシャルがありすぎる。中身もこれ以上ないってくらい素敵なのに……。絶対、わたしが守らないと。

「……じゃ、家着いたら連絡する」

「はい。すみません、送ってもらっちゃって」

「コンビニ行きたかったし、平気。明日も早いんでしょ。むしろこんな時間まで付き合わせてごめんって感じ」

「コンビニも一緒に行きたい……」

「買うもんじゃないでしょ」

「そういうことじゃなくてえ……」

離れたくないです、という気持ちを込めて見つめる。先輩はきょとんと目を瞬いた後、うつすらと目を染めて視線を外した。

「ちょ……そんな子犬みたいな顔やめて。あーその……ほら、家入んな。危ないから」

「うう……」

困らせているのは分かっている。でもすんなりと家に入るほどの聞き分けの良さは持ち合わせていない。

斜め上から伺うような視線を感じる。とん、と肩に大きくて硬い手が乗って、整った顔が間近に迫った。

——……あ。

軽く、表面だけを淡く触れさせるキスに、唇が小さく震えた。さつき一緒に飲んだエナドリが薄く香る。

「……………寝れそ？」

「……………うん」

安心したような目に胸が鈍く痛む。

……………そんなにわたしに触るの、嫌？

胸の中に薄黒いモヤが広がっていくのを感じながら笑うと、先輩は半歩分わたしから離れた。別れの合図だ。

「おやすみなさい」

「オヤスミ」

ボタン、と扉が閉まったと同時に大きくため息を吐いた。

「……そんなに魅力ないのかなあ」

大学一年生の時から憧れていた大好きな伊吹先輩と付き合って、もう半年。ずば抜けて優秀で要領のいい三つ年上の先輩は、当たり前だけど先に社会に——誰もが知っている大手IT企業に就職していて、まだ学生だったわたしは彼とのつながりが切れてしまわないよう必死になっていた。

教えてもらったSNSはもちろん監視。邪魔にならない程度に連絡して、会う約束を取り付けて。その努力の甲斐あって、あの超絶奥手でコミュ障な

先輩から「付き合う？」の言葉を引き出したのだ。わたしの一生分の運はもう使い果たしたと言える。

「それにしたって、まさかキスより先に進めないなんて思わなかった……」

お付き合いすることになって二人で遊ぶことが明確に“デート”になって、恋人らしく過ごすようになった。

それまでは先輩が好きなアニメのポップアップストアとか、映画とか。わたしが彼に会いたくて色々誘っていたけど、恋人同士になってからは伊吹先輩の方から誘ってくれる。

……なるべく家から出たくない人なのに、毎回こうやって家まで送ってくれるんだよね。自分は完全在宅勤務でお家デートなんだから、先輩はずっと

家にいられるのに。

大事にしてもらっていると思う。少なくともわたしが把握している交友関係の中で一番近いのはわたしだ。伊吹先輩はいつも——特に人混みでは気配を消しているし、誰かと雑談で盛り上がることもない。

人嫌いの引きこもり。コミュ障な天才。ハイスペックオタク。それがわたしの彼氏、小野寺伊吹だ。

「押しに負けて付き合っただけ、やっぱり女として見れないってことなのかなあ……」

はあ、と三度目のため息を吐く。

一度目を閉じて、ぱっと顔を上げる。

「何もしないうちから諦めちゃだめ。できることはやってみないと」

そうだ。だってわたしは伊吹先輩のことが大好きなのだ。

はじめて会ったあの日からずっと、先輩に振り向いてほしくて努力してきた。彼の不器用な優しさも、捻くれた物言いいも、そこに隠された愛情も。今更手放すことなんてできるわけがない。

鞆からスマホを出すと、その勢いのままショッピングサイトにアクセスした。



仕事終わり。先輩の家の最寄り駅に停まった電車から降りたタイミングで、ぼこん、とスマホの通知音が鳴る。

待ち受け画面には「駅着いた？」の文字と黒猫のアイコンが並んで表示されていた。ホームの隅に行ってメッセージアプリを開く。

「コンビニ寄ってから行きます、……と」

送信すると同時につく既読が嬉しい。伊吹先輩は基本的に即レスだ。

「一緒に行くから待ってて……？　だめ、今日はだめ……！」

慌てて返事を打ち込む。いつもなら嬉しいお迎え宣言も、今日ばかりは受

け取れない。

突然迎えを拒みだした後輩を怪しんでいる様子はあったけど、なんとか引き下がってもらえた。

……さすがに受け取ってるところを見られるのは恥ずかしいもん、ね。サプライズなんだし。

いつも二人で寄るコンビニを目指す。そこを受け取り指定にしている荷物を受け取るためだ。

数日前、勢いで買ったのは可愛い下着。それもただの下着ではない。ちょっとだけえっちなサイトで買った“そういう時専用”のもの。

——……伝票に『セクシー 猫 ランジェリー』って書いてませんように。商品画像の下にあった「これで彼氏もメロメロにゃん♡」という文言を思い出して今になって恥ずかしくなってくる。

眩しいくらいに明るいコンビニの自動ドアをくぐった。
売り出し中のアイドルが歌う流行りの曲が、軽快に流れていた。

彼女の様子がおかしい。

いつもなら即「待ってます！」と返ってくるはずなのに、なぜか今日は「一人で行きたい気分なんです」ときた。

コンビニに一人で行きたい気分ってなんだよ。いや普通にあるけど。あの子は違うだろ。俺とならどこにでも行きたいんじゃないのか？

ここまで一気に考えて、自己嫌悪で吐きそうになる。

——……どれだけ好かれてるつもりなんだよ。これだから陰キャは……

三つ歳下のメイは、学生時代からずっと変わらない。表情がくるくると変わって、全身で喜びと好意を伝えてくれる。自分とは正反対のオタクでも陰キャでも何でもない、普通の……底抜けに明るい大学生だった。

ガシガシと頭を搔く。適当に編んだ三つ編みが乱れた気がしたが、そんな

ことより気になるのはメイのことだ。

「……トイレ、そっちじゃないんだよなあ……」

明かりが漏れる扉の向こうにあるのは脱衣所。トイレはその隣だ。

「来るなりトイレはまあ、いい。分かる、僕にもある。でもトイレって言うて脱衣所に行くのはさすがに意味分からんだろ。中で何してんだ……?」

P Cの音量を絞って聞き耳を立てるが、特別物音はしない。

しかし鞆も持ち込んでいるのだ。何かをしていることは間違いない。

「……パンピの考えることは分からん。理解不能……」

そう言つて思考を投げようとしても、隠れた彼女の動向が気になつて仕方がない。

さりとて、あの扉を開けて「何してんの」と問う勇氣もない。

「だって他の男と連絡してるのかもしれんし……」

あーハイハイそうですね、こんな陰気で背が高いだけの男よりもっとハイスペックな男がいいですね。いや稼ぎだけで言ったら僕も相当なんだが？ やっぱりオタクはちよつと……てか？ 今更そんなこと許すわけないだろ。メイはもう僕の彼女なんだから。分かつて告白オツケーしたんだろ？ 返

品不可だってこと頭から抜け落ちてるんか？

諦めのように卑屈になつては、彼女への執着心がグラグラと湧き上がってくる。

一度太陽のあたたかさを知った月は、もうそれ無しではいられないのだ。たとえ太陽側は何も気にしていなくとも、こちらはしがみ付かざるを得ない。失えば二度と得られないことを誰よりも深く理解しているからだ。

「……何年拗らせたと思つてゐるわけ？ 絶対逃してやらないから」

覚悟しろよ、と胸の中でだけ呟く。口に出す度胸はない。

——ああ、もう。僕ってずっとこうだな、あの時からずっと。

思うのは、はじめてメイと出会った時のこと。僕が大学で学内のPCサポ

ートのバイトをしていた頃だった。

「あの……すみません。小野寺先輩……ですよね」

研究室で作業する僕の元に、今にも泣き出しそうな女の子がやってきた。抱えているのは薄ピンクのノートPC。話を聞くと「何もしてないのに壊れた」と言う。

……何かしたから壊れたんだろ。そもそも壊れてはない。

このバイトを始めて知ったが、世の中には自分で理解しようとする気のない人間が驚くほど多い。全く意味が分からないが、調べたり学ぼうという考えそのものが無いらしい。何しに大学まで来てるんだか。

——ま、給料貰ってるからやりますけど。

預かったそれを開くと延々と読み込みを続ける画面があった。

「明日提出なのに保存できなくて……」

「……ああ。ちょっと触るけど良い？」

「もちろんです！」

ただ動作が重くなっているだけのそれを、簡単な操作で止めてやる。すると何でもなかったかのようにレポートは保存された。

「ハイ」

「！　すごいです！　ずっとぐるぐるが止まらなくて、もう本当どうしよう

かと思つて……よかつたあ……」

今の今まで泣きそうだった顔が途端に笑顔でいっぱいになる。
大袈裟なほど喜ぶ彼女の声に顔を顰めた。

「……あ、ごめんなさい。大きい声出して……」

「……別に」

「あの、本当にありがとうございます。その……」

まだ何かあるのかと横目で見ると、その子は笑ったまま真面目な目を僕に向けた。

「次は自分で直したいので、こうなっちゃった原因とか聞いても大丈夫ですか？ あと、もし今時間が大丈夫だったら操作方法も教えて欲しくて」

驚いた。そんな事を言う人は初めてだったし、お世辞にもそんな事を言うような見た目をしていなかったから。

予想外の事に言葉が喉で詰まる。あーとかうーとか言いながら視線を泳がせた末にぎこちなく頷いた。

「ありがとうございます！」

「……あ、……ウン」

眩しい笑顔に思わず目を細める。

え、何？　なんか光って見えるんですけど……非オタって発光する？
手近な椅子を「お借りします」と断ってから引っ張ってくる仕草に、何故かドキドキした。貧弱な心臓が今までになく激しく鳴っていて胸が痛い。

「よろしくお願いします、小野寺先輩」

ぺこりと頭を下げるその子に、僕はろくに返事もできなかった。名前を聞けたのは、メイがPCを抱えてやってきた、三度目のことだった。

……今思うと、僕チョロすぎんか。いやでも、あれだけ懷かれたら好きにならない方がおかしいって。ああもう。

頭を抱えて喉の奥で唸る。まだ出てこないメイが気になって仕方がない。全身の神経が逆立って、少しの物音にも反応してしまう。

彼女を異性として好きなんだと気が付いてからというもの、連絡が来るだけで飛び上がる程浮かれたし、付き合う前からずっと彼氏ヅラをしてきた。これだからオタクは、と言われても構わない。誰かに横から搔っ攫われるくらいなら、多少痛くても自分のモノだと主張しておく方が何倍も良い。

「……何年掛けたと思ってるんだ。嫌われないように、気持ち悪がられないように……ここまで大事に、大事に関係値を積んできたのに」

もしこの後別れ話でも切り出そうものなら、速やかにこの部屋に閉じ込めてやる。鎖で繋いでもいいくらいだ。手加減も遠慮もしない。

「どうせ心変わりするんなら、我慢なんて必要ない」

ドス黒い感情が身体の内側に満ちていく。

自分の執着心の強さに引いていると、脱衣所のドアがのろのろと開いた。

「——！　メイ、どうし、た……」

申し訳なさそうな、恥ずかしそうな。複雑な感情が入り混じった顔がドアの隙間から覗いて、そしてゆっくりと脱衣所から出てきた彼女に大きく目を見開いた。

「……は？」

僕の可愛い可愛い彼女は、その華奢かつ豊満な身体の殆どを晒す衣服を纏っていた。

ピンクの細い首輪には小さな鈴がある。真っ白なブラにフリルをふんだんに使ったショーツ。——見間違いでなければ、ショーツの真ん中はぱっくりと割れている。ところどころ卑猥さを際立たせる為だけに存在しているような謎の紐があしらわれ、彼女の肉体の柔らかさをこれでもかと主張していた。頭上にはふわふわの白い耳、そして脚の間からは尻尾が見える。

夢でなければメイは白猫のどエロいコスプレをして、僕の部屋に居る。

「……にゃ……ん」

小さな鳴き声に、くらりと眩暈がした。

——……失敗したかも。

大きく目を見開いてわたしを凝視する先輩に、浮かれていた身体が羞恥という炎に焼き尽くされそう。

あの先輩が褒め言葉を並べたてて抱きしめてくれるとは思っていなかったけど、無言のまま何も起こらないとも思っていなかった。

ドン引きしてる？　ど、どうしよう。知らん顔して着替えに戻るべき？　居た堪れなさにどんどん顔が熱くなっていく。

「あの……」

「あのさ」

同じタイミングで出た声に、びっくりと肩がすくんだ。

先輩が猫背のままズンズンと歩いてきたと思ったら、そのまま流れるようにベッドに押し倒される。

「きゃ……っ」

真上にある顔を見上げると、仄暗い瞳の奥に熱をゆらめかせる真剣な表情があった。

——……あ、れ。これ、もしかして成功して、る……？

剥き出しの肌に注がれる視線が熱い。はじめて感じる先輩の情欲の欠片に心臓がうるさい。

乾いた指が鎖骨に触れて、そのままピンクの細い首輪をなぞった。

「それ本気？」

「はい」

すう、と細く息を吸う音がした後、先輩がいつもより掠れた声でつらつらと言葉を並べている。

わたしはその間もずっと注がれる熱のこもった眼差しと、肌をかすめる硬い男の指の感触に夢中になっていた。

触るのが嫌とかじゃ、なかったんだ……！

安堵と緊張、それから期待と喜びが一緒になって湧き上がってくる。はじめて身を置いた先輩のベッドはいい匂いがして、それだけでドキドキする。もう自分の格好の恥ずかしさなんて薄れていた。

「何その顔。今自分がどういう状況なのか、ホントに分かってる？」

「分かってます！」

経験は多くないけど、全くの無知でもない。

でも怖くはなかった。大好きな人の一番近いところに居たい。好きになったあの日からずっと、その思いだけがわたしを突き動かしている。

「——……あ、そ。じゃあもうこの先何があってもクレームは受け付けないんで。他人^{ひと}を煽^ほる時の覚悟つてものを覚えて帰ってもろて」

ミントの匂いをぶつけるようなキスに息が止まる。

隙間なんてない。驚きに閉じかけた唇を舌が割って入ってきて、そのまま口の中を嬲り倒される。

ぐぢゅ……にぢ♡ぢゅ、う……♡内側から響く水音に、首の裏がゾクゾクと震えた。

「は……、っん、んん……」

「は……ア……ね、本当どういうつもり？　コソコソこんなもん着て……な
んでこんな……服？　下着？　買ったの」

「それは……」

はじめての深いキスに頭がぼんやりする。相変わらず苛立ったような口ぶりの先輩から目を逸らして、重い口を開いた。

「……先輩が」

「僕が？」

「先輩が、全然……手を出してくれないから……女として見て欲しくて……」

短絡的な作戦が今になって猛烈に恥ずかしい。顔を背けようとしたのに、大きな手がそれを拒んだ。頬を挟まれて強制的に目が合う。

「は、はあ……？　僕がどんな気持ちでこの半年居たと思ってるわけ!？」

「ひっ」

「あーもう、分かった。全然伝わってなかったって事ね、把握」

先輩は深く、大きなため息を吐いた。

「人の気も知らないで。大体、君だって僕のこと男として見てなかっただろ？」

「え……？　ッあ、あ……」

「いつまでも先輩、先輩……って。僕はもう君の先輩じゃなくて彼氏なんだが？　分かってる？　そりゃ僕は陰気なオタクで、背が高いだけで体格がいわけでもないし、君からすると頼りないかもしれないけど……」

意識の外にあった両手が、先輩の右手によって簡単にまとめられる。ごつごつした手があまりにも簡単に、そして強固にわたしの自由を奪った。

……うそ、びくともしない……。

「でも男、なんだよ。分かる？ 君にその気がないのに無理矢理抱くのは良くないと思って我慢してただけで、いつだって出来る。こうやって簡単に一方的に君を好きに出来る。……出来ちゃうんだよ」

低い掠れ声に叱られて息を飲んだ。

苦しそうな顔してる……。いつも我慢してくれてたってこと？ わたしを傷つけないために……？

口元だけは笑っているけど、暗い双眸は悲痛な色が揺れている。理性と本能がぶつかり合って喧嘩しているみたい。

頭の上で両手を押さえられたまま、そっと視線を絡めた。こんな時だというのに、先輩に大事にしてもらえていた事実が震えるほど喜んでしまう。

下腹部の奥がきゅう、と甘く疼いた。

——……あ、あ……♡ どうしよう。このまま好きにされたい……♡ わたしが、いいよって言ったら……してくれる？

「い、ぶき……先輩」

「何？ 言っとくけど離す気ないから」

「ちが、そうじゃなくて……っ」

「どれだけ顎を持ち上げても届かない距離が恨めしい。

「……今まで我慢してたこと、全部……して？ 伊吹せ、……伊吹くんとえっちしたい。離しちゃ、いや。我慢も嫌……です」

自分から誘うなんて初めてだった。瞬く間に耳が熱くなる。でもその恥ずかしさと引き換えにしても、今の気持ちを伝えたかった。

囚われている手首に圧が加わって、ひと呼吸もする間もなく唇を奪われた。

「んぐッ」

濡れた舌が挟じ込まれて息ができない。

舌を搦めとって、ぢゆる、ぢゆく♡ 根本から啜り上げる。

……あ♡ あ、お口あつい……♡ 舌の根元がじんじんする……♡

たっぷりと唾液を絡めて口を離すと、先輩は濡れたわたしの唇をべろりと舐め上げた。

「は……う、あ……♡ んんッ♡ あ、や……♡」

「やだ？ 今更何言ってるの。こんな触られるためにある下着着てるくせに」
「あ♡ あ、うう……♡ だって、乳首……ッ♡ あ♡ あ♡」

薄くて頼りない布の上から、かりかり♡ 乳首を弄られて甘えた声が出て
しまう。

ぷっくりと膨らんだ乳首は安っぽい生地を卑猥に押し上げる。すると長い
指にすかさずそこを、くりくり……♡ かりかり♡ 遊ばれてあつという間
に悦くなる。

ゝッ♡ 久しぶりだから……っあ、あ♡ これだけで感じちゃう……♡
乳首きもち……っ♡ あ♡ あ♡ むずむずする……ッ♡ もっとして♡

もつと先輩に触ってほしい……♡

「……はは。ちょっと触っただけで顔とろつとろ。乳首好きなんだ？　かつちかちの乳首触るの楽し……」

「あっ♡ あ♡ んあ、あ♡ 弾くのため……っ♡ んぐ、すき♡ 伊吹くんに触ってもらうの、好き……っ♡」

面白がるように乳首を弾いた後、きゅうッ♡ と甘く抓られた。鮮烈な刺激に、びくんっ♡ と肩が跳ねる。

「あッ♡」

「——……それさ、わざと言ってる？　いや、もう何でもいいか」

「へ……？　ッあ、あ　♡　あっ♡」

胸の谷間を飾るピンクリボンが雑に解かれて、ブラが外れた。弾むようにして溢れた乳房を乾いた手が掴んで、そのまま直接乳首を捏ねる。

ギラギラと鈍く光る目がわたしを捉えて、それはそれは意地悪く笑った。

「もう何言われても、泣いてもやめてやんない。僕に触られると嬉しいって言ったの君だし、僕煽り耐性ゼロなんで。今から半年分……いや四年半の気持ちちゃんと受け止めてもらいますわ」

「えっ、あ、あっ♡　んあ♡　あ——♡……っ♡」

先輩は左手で乳首を、しゅりしゅり♡　扱きながら、もう片方の乳首を口

に含んだ。

ぬりゆぬりゆ♡ れりゆ……♡ ぢゆ♡ にぢゆ♡ 薄い唇が乳輪ごと乳首を握ねて、ねっとり熱い粘膜が絡みつく。

んああ……♡ お♡ ちくびきもちい……♡ あ♡ あ♡ ちゅぱちゅぱするの、だめ、だめ……♡ お♡ じんじんする……♡

「フー……♡ すご、柔らか……♡ 良い匂いするし、ムカつく……。ホント、今まで我慢してたの褒めて欲しい」

「あ、あ……♡ っん、ん♡ んぐ……♡ ツあ、あ♡ う、う……♡」

左右から絶え間なく違う刺激が流れ込んできて全身に力が入る。つま先がシーツを蹴って、ふるふると震えた。

くっ♡ きもち♡ あ、あ♡ 腰……っ♡ 動いちゃ、う♡ 恥ずかし
いの到我慢できな、い……♡

ぢゅ……っ♡ 音を立てて口を離れた先輩が口角を釣り上げた。

「え？ 何、もう我慢できない？ 腰動いてるんですけど」

「っぐう……♡」

「僕には我慢させるのに、自分は触って欲しくてお強請りとか……都合良すぎ。ハイハイ、もうちよっと我慢しましょうね」

「我慢なんてさせて、な……っ♡ あ♡ あっ♡ んぐ♡ ツふ、う……♡」

身体を起こした先輩がわたしを見て愉しげに目を細めた。手の拘束が解か

れた代わりに、今度は両方の乳首に、ぴと……♡ 指先が触れた。

——……ッあ♡ これだめ……ッ♡

しゅりしゅり♡ かりかり♡ 淡い快感だけを塗りつける絶妙な加減でそうされると、腰をへこへこ♡ 振るのをやめられない。

真上から注がれる粘ついた視線を浴びて、どんどん感度が上がっていくのが分かる……♡

お♡ だめ♡ こんなずっと乳首だけさらたら……♡ つ♡ あ♡ きもち♡
先輩に見られながら、勝手にきもちよくなっちゃ、う……♡

「あ♡ んっ、んぐ♡ あ♡ ああ……ッう♡ つら、い♡ きもちいいの、
つらい……いい♡」

「こら、我慢して。……なんて言っても無駄か。人間ならともかく、メイは

猫になったんだもんね？ 物欲しそうに腰振って……どこ触って欲しいの？」
「ひ、う……♡ いじわる……♡ ツ あ♡ んん、ぐう……♡ ツ♡」

子どもをあやすようなわざとらしい声でくすぐすと笑いながら言われると、
顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

ツう、う♡ でももう我慢できない……♡ ツ♡ 先輩の指で触ってほし……
♡ いい♡

足を広げて膝を立てて見せる。恥ずかしさにおかしくなりそう。あつて無い
ような下着の布が左右に割れて、ひくひく♡ 震える甘勃ちしたクリトリ
スも、潤んだおまんこも、先輩に差し出した。

「——……♡ ツ♡ で、何？ ここをどうして欲しいの？」

「あ、あ……ん、う……♡ クリ……を、……ッうう」

「……ッむり！ 言えない……っ！

先輩の顔も見れないほど心臓がうるさい。きつく目を閉じて顔を背けた瞬間、何かふわふわしたものがクリトリスを撫で上げた。

「ふあ、っ？♡」

「クリを……何？ こうして欲しかった？」

「え……あ、あ♡ ちが……♡ そうじゃな、い……♡」

「ホント？ その割には随分……期待してるように見えるけど」

首をかしげる先輩の手にあるのは“尻尾”

ショーツのお尻側に付いていたそれで、ふわふわ♡ こしょこしょ♡ 際どい場所をくすぐってくる。長い被毛は蜜を吸っていて、クリトリスをなぞる度に感じたこともない刺激が走った♡

「あッ!?♡ あ♡ ああ♡ それ、だめ……ッ♡ ん♡ ん♡ ぐ、く♡ しっぱ♡ あ♡ んお♡ クリ……っぞりぞりするの、やあ、あ……っ♡♡」

「は、カワイー……、気持ちいい？ クリすごい膨らんでる。メイが漏らしたやつで尻尾びしょ濡れ。こんなどすけべ下着選んじやうくらい、こうして欲しかったとか……ホント勘弁してほしい。可愛すぎ」

「あ♡ あう、う……ッ♡ んっ♡ ぐ♡ は♡ へ、あ♡ いく♡ ほんと、待って……っえ♡ あ♡ 広げちゃ、やあ……ッ♡ お♡ いっちやう……ッ♡」

♡ ♡ 中略 ♡ ♡

(濡れた猫の尻尾でクリ責めされて潮吹きアクメ↓指入れ)

お臍の裏なのかクリトリスの裏なのか、よく分からない。

とにかくそこを指の腹で、とんとん♡ されると内側から快感が強制的に
滲んでくる。じゅわじゅわと蜜があふれて、じっとしていられない。

ゝゝ♡ なに、なにこれ♡ お♡ 腰浮いちゃう♡ お腹むずむずする
……♡ お♡ お♡ きもちいの溜まって……♡ 先輩の指に媚びち
やう、づ……♡

「我慢しないで。こら、唇噛むのやめな」

「ぶあッ♡ あ、っあえ♡ ああ♡ へ、えっ♡ んあ♡ あ、あッ♡」

「そうそう。……あー……その顔ヤバイ。涎だらだら垂らして泣きながら悦んでるの、ちんぽにクる……可愛すぎてイライラする。僕のちんぽ咥えられるように、ちゃんと払っておかないとね。痛いの嫌でしょ、お互いに」

「ぶああ♡ は、え♡ はっ♡ あお♡ あッ♡ お——……♡」

先輩の親指を咥えさせられて口が開けっぱなしになる。舌を、なでなで♡ して甘やかされると、理性とか知性まで溶けていくみたい。

とんとん♡ にちゆにちゆ♡ ぐにぐにゆ……♡ とんとん♡

きもちいいところだけ、ずーっと甘やかされてる……♡ つ♡ お♡ お♡ 出

る♡　でるっ♡　またきもちいの出ちゃう……っ♡　おまんこでイッっちゃ
う……っ♡

もうあとひと押し of 刺激でイけそう de、腰をぐぐ……っ♡　と持ち上げる。
先輩は唇をにんまりと嬉しそうに歪めた。

「イきそうなんだ？　指すっごい締め付けてくる。……今イけたら、ご褒美
あげるよ。ほら、がんばれ、がんばれ。僕にしか見せられない可愛くてみつ
ともない顔晒して、気持ちよくまんこイきして？」

「は、おおっ♡　おッ♡　んああ♡　は、ああ♡　ッ♡　ああ、ッあ——
ッ♡♡」

ぷしゅッ♡　ぷしゅッ♡　びくびく♡　び、っくん♡

くっおお♡ でちゃ……っ♡ あ♡ あ♡ しゅご、い♡ 中イキはじ
めて……♡

「すっご……まだ出てる。こんなに腰突き出して気持ちいいのアピールする
くらい良かったんだ？ ほら、分かるでしょ？ ここ、ぢゅぽぢゅぽ音鳴る
くらい濡れてる。まんこ柔らかくできて偉いね、メイ」

「んは、っあ、あ♡ は——……っ♡ あ、あ♡ 恥ずか、し……っう、ぐ♡
」

指が引き抜かれても、まだちゃんと口を閉じることができない。
ぬこ……ぬこ……♡ と出入りする指によってアクメ感を引き伸ばされて、
ガクガクと震える腰をゆらめかせた。

あ、あ……♡ やめたいのに、指追いかけちゃ、う……♡ こんなとこ見られるの、やだ、やあ……♡

恥ずかしい下着に身を包んで、大好きな人の前で浅ましく快感を追いかける。脳が焼き切れそうなほど恥ずかしいのに、おまんこを、よしよし♡ されるとろけそうなくらい気持ちいい……♡

「は……っお、お♡」

「……ン、もういいかな。メイのちっちゃいまんこでも、流石にもう入るでしょ。力入んないくらいとろっとろだもんね、よちよち♡」

「んぐ、う……♡」

明らかに揶揄っている声にも反論できない。先輩の指で支えられていた腰

は、ずりりと指が引き抜かれると共にベッドに落ちた。

絶え間なく与えられていた快楽から解放されたのに、息をするだけで感じ
てしまう。

涙目をしばしばと瞬いていると、そのまま身体をひっくり返された。

「ひゃ、う……」

「こうするとホントに猫ちゃんみたいだね。……尻尾びしょ濡れだけど。そ
う、腰上げて」

「あ……え、後ろ、から……？♡」

「ウン。多分……見るとびっくりして入んなくなりそうだし。何、正面から
が良かった？ カワイ、いいよ、これ終わったら好きなだけ正常位で抱き
潰してあげる」

とろけきつた頭では伊吹先輩が言っていることの半分も理解できない。うつ伏せになつて腰だけを上げて、丸いお尻を撫でてもらう。

顔を置いた位置にある枕から先輩の匂いがして、ますます頭がぼんやりする。

「っあ♡ あ、あ……♡ おちんぽ……熱い……♡」

「ゴム着けてても分かるんだ？ 知らなかった。そう、メイとの交尾専用ちんぽ。もう死ぬまでこれしか啜えられないから、ちゃんと形覚えてね」